

「巖島神社の塔」

巖島神社は、平清盛をはじめとする平家一門や足利尊氏、豊臣秀吉、長州の大内氏。毛利氏ら、時の権力者の崇敬を集めて栄えた。その社殿の内6棟が国宝、14棟が重文。また国宝平家納経を始めとして多くの文化財を所蔵。鳥居も重文。

多宝塔（たほうとう）（重要文化財）

大永3年(1523年)僧周歆（しゅうかん）によって建立。通称二重塔とも呼ばれる。かつてこのそばに多宝院という寺があったと記録にある。天文24年（1555）9月、巖島合戦の折、陶晴賢は二万有余の大軍を率いて巖島に渡り、この丘に陣を張った。

五重塔（ごじゅうのとう）（重要文化財）

千畳閣の隣に建つ五重塔は、和様と唐様を巧みに調和させた建築様式で、桧皮葺（ひわだぶき）の屋根、朱塗りの柱や垂木（たるき）のコントラストが美しい塔です。高さは27.6m。応永14年(1407年)に建立されたものと伝えられています。

内部は完全な唐様で、一般の見学はできませんが、内陣天井に龍、外陣天井には葡萄唐草、来迎壁の表には蓮池、裏には白衣観音像などが極彩色で描かれています。塔内にあった仏像は、明治元年の神仏分離令により、大願寺に遷されました。またこの五重塔が建つ塔の岡は、巖島合戦で陶軍が陣を構えたと伝えられています。

大願寺（だいがんじ）

正式な呼び名は、亀居山方光院大願寺（ききょざんほうこういんだいがんじ）。開基は不明ですが、建仁（けんにん）年間(1201年～1203年)の僧了海（りょうかい）が再興したと伝えられる真言宗の古刹です。

明治の神仏分離令までは巖島神社の普請奉行として寺院の修理・造営を一手に担っていました。亀居山（ききょざん）とは、千畳閣・五重塔がある塔の岡一帯の海に突き出たところで、空から観ると亀の姿に似ているところから名が付いたといわれています。大願寺は、東側の塔の岡から西側の多宝塔・経の尾付近までが境内地で巖島伽藍（いつくしまがらん）と呼ばれ多くの堂塔がありました。現在の本堂は昔の僧坊で、大経堂である千畳閣が本堂になる予定でした。

この寺の秘仏巖島弁財天は弘法大師空海の作と伝えられ、日本三弁財天の一つ。弁財天は現世利益の女神様で、神仏習合の時代は巖島神社の主神・市杵島姫令が理財の女神として崇められるようになり、仏教の弁財天と同一視されていました。

神仏分離令によって巖島神社から遷されたこの巖島弁財天をはじめ、宮島に現存する仏像の中で最も古いとされる木造薬師如来像（重要文化財）、千畳閣の本尊だった木造釈迦如来坐像（重要文化財）、その両脇を守っていた阿難尊者像と迦葉尊者像（ともに重要文化財）、五重塔の本尊だった三尊像、多宝塔の本尊だった薬師如来像、護摩堂の本尊だった如意輪観世音菩薩などを収蔵しています。

また、本堂奥の書院は、第二次長州戦争の際、勝海舟と長州藩を代表する藩士らが講和会議をした場所護摩堂の本尊だった如意輪観世音菩薩などを収蔵しています。また、本堂奥の書院は、第二次長州戦争の際、勝海舟と長州藩を代表する藩士らが講和会議をした場所として知られます。